

ドン・ジュアンに観るバイロン像 (14)

楠 本 哲 夫

〈IV〉

Byron の、憂愁な、問題を掲げた主人公に対する Milton の感化、影響力は、すくなくとも、すでに 1812 年に始まったが、この主題は つねに（そしてもともとは）1821~22 の、有利な地位から学ばれてきて、そのとき、〈Cain〉が出版され、かつ、かの有名な（劇についての）議論が始められた。Byron は冒瀆の言辞だ との非難に対し、Cain を弁護するのに、Milton を擁護者として求めたのである。

Cain が 冒瀆的であるなら Paradise Lost も冒瀆的である。そして あの文句、“悪魔よ、汝は美徳なれ” は、まさに、この詩から出たもの、悪魔 Satan の口をついて出たものである、—— そして、Lucifer の、そして Mystery の that には、なにか それ以上のものがないだろうか？ Cain は劇以上の何ものでもなく、一片の、議論ではない。私は Lucifer をして The Thirty-nine Articles を説明（解明）させることは出来ないし、又、Divines の如く話すことも出来ぬ。それは、決して 彼の目的に通じなかったであろう——いや、人は亦、theirs と考へないだろう。They は 彼に、彼らに、それについて、書くべき主題を与へたことに対して感謝すべきである。

The Prince of Evil の中に悪がなければ 彼らは何をするだろうか？ Othello の occupation は would be gone 失くなるだろう。私は最早や、その弁護において 絶対必要な以上は Lucifer に言わせないだろう。Milton として his Satan にさせる、その半分すら させないだろう。私は彼の劇的

性格を維持すべく 強制された。

Au resta 私は しっかりと 旧約聖書に すがりついてきて そして 私のモラルを疑う、凡ての者に挑戦する。

Johnson —— Milton にめがけて もう一つの石を投げる機会を歎んだだろうが —— は、彼が 彼の悪魔（極悪非道）の魂の口の中に不敬と冒瀆をすら投げ入れることへの、すべての酷評、排難から 彼を救い出す。

いかなるルールで それなら 私はすべての責めを享けることになるのだろうか？

Lee Hunt が Byron の議論に後で、Lady Byron and Some of His Contemporaries の中で、comment としたとき、彼は Byron が故意に“煙にまく”評言を切り抜け、（おしきって）進んだ。Byron の弁護は、—— Hunt に言わせると —— sincere 誠実ではないのである。Cain は確かに、悪とその起源に関してのユダヤ教徒の 粗野な、未熟な見解への攻撃を意図された、攻撃のつもりだったのだ。

Byron 卿は この問題について さほどには考えていたのではないかもしれないが、そのようなときに、この作品をかくことを計画した。—— だが、そんな感情になっていた。そのような問題を意識していた。だから、もしそうでなかったとすれば Mr Shelley は彼を そうでないように to be otherwise させはしなかっただろう。

しかし真相は 内在的証拠から明らかである。Milton は彼の“失樂園”の中で彼の時代の宗教に反抗する意図は全くなかった。この二つの詩の読者もこのことは確信した。そして読者の感覚は正しかった。なるほど Milton の神学の理屈っぽい部分はとてもひどい（bad）ものだったので後年になって ある者たちの心に疑惑がかすめた。つまり 彼が敵意に、自らに反する議論をしてないだろうかどうか の疑惑が、だがしかし 彼の純真な性格や経歴の一瞬の蒐集はその者を片付け廃止する。Milton は、確かに 後で彼の意見が変わっ

てゆき、そしてよりキリスト教的、キリスト教義に鎮まったように、その当時、つまり、“失樂園”をかいた頃、はっきりとカルビン教主義者であり、彼の一流、徒党の、あらゆる憂鬱、暗さをもつ、墮落、腐敗的弁論術の支配をうけ易かった。

Hunt の批判は、Byron の述べたことは lies 嘘よりもむしろ 昏迷だということをはっきりさせている。Byron の、注意深い散文は、その問題に対して真に適切な、あらゆるものを云わないままにしている。というのはその事實は、Milton の詩は、根本的に—— Cain が根本的に懐疑的であるのに—— fidelistic 信仰主義的であるから。

このことは Byron が Lucifer を彼の劇の、道徳的に基本的なものとして見ていたのではない。逆に Byron ははっきりと、(そして誠実に) Lucifer を批判的光り、の中に表現、提示している。

しかし もし彼が 彼の悪魔のような、(極悪非道の) プリンスにある negative qualities を与えていたら 彼は亦 彼の為に 非常に多くの sympathetic な contexts を創っただろう、幾つかの力強いスピーチのみならず。

Lucifer の Cain への別れの言葉は Byron の最も深い確信の一つとして stirring rhetorical conviction なのである。即ち intellectual freedom なのである。

Byron の Lucifer の mix された性格は、Byron を post-Milton の批判の、かの批判の線にふさわしい interior —— demon's gradeur or power or suffering と同意する —— としている。

Byron の Milton についての考えの多くはそして特に“失樂園”は、あまり関係がない文学史の、かの odd な fragment と —— というのは、Byron の Milton 的 preoccupation 夢中は、しばしば、technical な 性格だった。しかし Byron が Milton a Satan の性格に、comment をはっきりと echo したとき、彼ははっきりと、あの 18 世紀の批評家達 —— 悪魔 Satan は“失樂園”

のヒーローであるとのロマンティックな考への根拠を確立するため大いに貢献した——のこえをエコーしたのである。

Aristotle や Rymex から tragedy 悲劇の主体が（そして *meo periculo* を加えるが）そして一つの悲劇の詩は 罪深くなければならぬと言わねばならぬ、それは “terror と pity” 恐怖と罪、つまり 悲劇の最後を excite するためのなのである。

“詩人がその獲得について努力する pity 哀れ、同情は犯罪者に対している。恐怖は同様に the said criminal への懲罰である。そして彼がもしあまりにも偉大な offender であるとして示されるならば、同情されないだろう。そして亦、もし全面的に、無知であれば 彼の処置は不正であろう。” 誰が “失樂園” のヒーローなのか？ 何故サタンは——そしてマクベス、そしてリチャードは そして オセロは そして ピエレは そしてロザリオは そしてツァングは？

Byron が Satan を理想化してないのは 丁度 彼が自身の Lucifer を理想化していないのと同じだ。むしろ Byron の理論は 落ちた天使の人間らしくされた解釈によるのである。この点では、Byron の観方も 18C の批判的伝統の直接の inheritor 相続者なのである——つまり Milton の反逆の天使の蓋然性を擁護しようとして それは、彼の人間的性格と反動の、丹念な註釈を発展した。

彼の “Cain” と Milton への註釈と異なって、Byron の “失樂園” の ヒーローとしての Satan への註釈は全面的に真剣である。Byron は 悪魔は Milton の epic では あいまいに描かれている、と信じた。そして もし リー・ハントが Paradise Lost の中でオーソドックス的態度をみることができたら Byron は等しく、この詩が 根本的に nondogmatic だったと等しく確信できたでしょう。“Cain は” Byron はそう述べたが “一つの論証ではない。” それは 悪魔の側でもなく 神の側でも、どちらでもない側を再提出する。というのは、Byron にはいささかも 意志はないから（つまり、少

しの、性（傾）向もない。彼の詩的物語りで、戦艦の形を選ぶ。

さらに Byron は感じた—— “Cain” の nondogmatic な 諸の性質は、厳しく Milton の伝統の中にあると。というのは Byron は失樂園の中で 明白な理論を見ることが 出来なかったから。Milton の epic は Byron にとって これを創ったものにとって open mind を鏡に映した。Byron によれば それらは “prove nothing” なのである。

彼の偉大なエピックは何物も実証し得ない。彼は確かに Satan に対して 同情を呼ぶ。そして彼を損なわれた人物に申し立てようとする—— つまり 彼は彼に ヒューマン、パッションも亦 与えようとする。彼に Adam と Eve を同情させ、Prometheus の如く彼自身を同情化させようとする……… 私は彼の信仰が何であるかを知るために私はとても好奇心をもった。“Paradise Lost” と “Regain” は この点では私を満足させ得ない。

この text は Milton の、Byron の悪魔主義に及した影響を理解することへの 決定的なものである。それは 彼の Milton への 態度の胚種を含むのみならず、何故 Milton の影響力が、Byron のヒーローに それが とった格別のフォームを与えたのか を説明している。

Byron の憂鬱なヒーロー達は 永らく認められて来たが—— Milton の悪魔の子孫としての、Kaar Moor, Ambroiso, そして Schedoni の如き有名な悪漢ヒーローの仲介を通して。

実に Byron が “Satan は Paradise Lost のヒーロー” であると 悪名高き remark をしたとき 彼は直接に Paradise Lost について、ちっとも、評言したのではない。彼の手紙は 彼の友人 Francis Hodgson への返書だったが—— 彼は Gothic の悪の主演の道徳的墮落を排難した—— “あの長く続いた、失われた勇気で飾られた放蕩者、そして凡ての温かい愛の滋しさによって 興味あるものとした。… They は若者の心に最悪の結果をもつことは出来ぬ。”

Byron の Hodgson 師への答は（或る程度迄）彼の繰返された主張——彼の、悲劇の英雄達は決して 行動の範として数へられるものではない——を正当化する。

Giaur, Conrad, Manfred, Lucifer, Christianそして、他の者たちの歴史は、罪と苦しみの歴史である。そして この理由により、Byron は批評家達が、彼を“不道德”と批難攻撃したとき、厳然と反対したのは正しかった。

Byron は Cain 及び 彼自身の多くの、暗い英雄達を擁護した。—— 中世文学の魅力的悪漢のみならず。それは 彼が“Paradise Lost”を読んだと同じ理由で。Milton の詩は Byron にとって 知的に多くの問題を含み、というのは Milton の性格のすべてが人間化、性格化されていたように思えるからである。

Pope や他の人々に従って Byron は Milton が神を肖像化したことを（神が全面的に、あまりにも現実化され、ゆえに、神の長い神学的論説を こっけいな論説に響かせたから）批難した。Byron に依れば 彼は決して叙事詩の中に現われてくるとは思わなかったろう。同様に 悪魔の性格は with greatest art ものすごく正確に創られたが、心理学的結果は 犯罪の英雄のレポートだった。確かに彼は有罪だが 彼は悪の純粋な主義ではなかった。

Byron が“Paradise Lost”を humanistic に読んだことが Byron を扶けて 彼自身の有名な、犯罪的英雄の肖像画を創り出したのだ。もし Byron が Milton の真意は果たして 何だったのかを疑っていたら 彼自身の生涯の不安と懷疑主義（第一窮極の哲学的 神学的懷疑についての）は絶えず、彼の中世的 東洋的物語り及び彼の形而上学的劇の中に現われたであろう。

これらの詩は彼の哲学的確信を述べるものではなく、彼を決してわずらわすことのない知的問題を開拓するための Byron の手段である。さらに この彼の知的疑問のための彼の決定的な車輪は彼の悪名高い、そして複雑な Heros であり そのすべては我々が知る限りでは、Miltin の悪魔にその heritage をた

どることは出来ない。

Byron は妻に語った——自分は墮ちこちた天使の abatar なのだ と信じている。この風変りな とりわけ 彼の“失樂園”の悪魔への彼の魅力を説明する。Byronの初期のヒーローは しばしば 多かれ少なかれ 明らかなやり方で Miltonの天使と関連がある。

He stood a stranger in this breathing world,
An erring spirit from another hurl'd.
(*Lara*, I, 315-16)

Enough—no foreign foe could quell
Thy soul, till from itself it fell.
(*The Giaour*, 138-39)

His soul was changed, before his deeds had driven
Him forth to war with man and forfeit heaven.
(*The Corsair*, I, 251-52)

彼は息づく世界に不案内者として立ち
ほうりなげられた別世界からの間違った魂をもち

(*Lala*, I, 315-316)

充分だ——誰一人知らない敵が鎮めることは
できぬのだ。汝の魂を、それが自ら墮ちゆく迄は

(*The Giour*, 138-39)

彼の魂は変わった、彼の行動が 彼を駆り
たて、人間と戦って天を喪失する前に

(*The Corsair*, I, 251, 52)

そのような全ての人間が、Byronにとって、軍人なるも魅力的人間である。彼らはすべて悪夢であり、そして彼の彼らへの程度は彼の敘情詩“Prometheus”の中に描かれている。Shelleyの如く Byronは一方Satanの神聖な叛逆を、他方Prometheusの反逆とを、区別した。彼の悪魔的ヒーローは すべて適宜、自滅している。だがPrometheusは任意な、外部的な力の内なる犠牲者である。人間に対して戦を挑むどころか——Byronの悪魔的英雄がするように——プロメシウスは すばらしく、人間的である。Byronの言葉を借りれ

ば、彼は全く悲劇的人物ではない。

しかし Byron のプロメシウスの そして、悪魔的なものとの この差別は 必要がある一方、この諸の詩は はっきりと 共鳴的で出された Byron のヒーロー達の中で 最も非難すべきものでさへも描いている。L・Blessington への Byron の評言は 彼の悪人への共鳴的肖像画の理由を説明する。

“It is my respect for morals that makes me so indignant against its vile substitute cant, with which I wage war, and this the good-natured world chooses to consider as a sign of my wickedness. We are all the creatures of circumstance,” continued Byron; “the greater part of our errors are caused, if not excused, by events and situations over which we have had little control; the world see the faults, but they see not what led to them: therefore I am always lenient to crimes that have brought their own punishment, while I am little disposed to pity those who think they atone for their own sins by exposing those of others, and add cant and hypocrisy to the catalogue of their vices.”³⁷

— それに私が戦を挑む —

“悪しき 代用的 Cant へ 私が 甚しく、憤慨するのは モラルへの私の尊敬なのであり、そしてそれが 善良な社会が 私の悪のサインとして考えるべく きめるものであるでしょう。我々は皆 環境の創るものなのです。”

Byron は続けた “我々の罪の大部分 は、我々があまり コントロールし得ない、事柄や、環境によって、実行されていないとしても、原因となっているのです。この世は、その誤りを見ますが、何が彼らを卒いたかは知りません。だから私はいつも 彼ら自身の罪をもたらす罪悪に対して寛大であり、一方私は、他人の悪をさらすことによって 自身の罪を償うと思う人々に、あまりに同情し得ないし、cant と hypocrisy を、彼等の偽善の悪徳の目録へ加えることを、あまりしたくない。

かくの如く Byron は 上品な改革者を話す。 Byron の有名な 罪深い、冒険者の話しはすべて、その中で、共感が英雄のために、読者をして、その場合のあらゆる事情を考へさせることによって、そのヒーローに対し呼び起こさ

れるが如き、すべての使用である。読者は 理解されることを許すのではなく、求めようとするを頼まれるのである。

There was in him a vital scorn of all:
 As if the worst had fall'n which could befall,
 He stood a stranger in this breathing world,
 An erring spirit from another hurl'd;
 A thing of dark imaginings, that shaped
 By choice the perils he by chance escaped;
 But 'scaped in vain, for in their memory yet
 His mind would half exult and half regret.
 With more capacity for love than earth
 Bestows on most of mortal mould and birth,
 His early dreams of good outstripp'd the truth,
 And troubled manhood follow'd baffled youth;
 With thought of years in phantom chase misspent,
 And wasted powers for better purpose lent;
 And fiery passions that had pour'd their wrath
 In hurried desolation o'er his path,
 And left the beelings all at strife

彼の中にはすべての肝要な軽別があった。

あたかもふりかかった最悪なものが落ちたかの如く

彼はこの呼吸いきづく世の中で他国者として立った

別世界からの間違った魂として。

暗い想像したものの一つとして、形造られ、

好んで、いや、たまたま、彼は危険を逃れた。

しかし空しく逃れ、というのは その危険の中でもまだ

彼の心は半ば高まり 半ばいかに思う。

地上よりも 愛への容積をもって

投げかける、生ける形と出生への多くを。

彼の若き日の良さが、真実を越いこした

そして悩む人間がどぎまぎする若者を追うた。

浪費された幻影を追うた 何年も思索を続け

より良き目的のための力を失った。

そしてその怒りを注いだ 燃える情熱は
彼の小道の上を忙ぎゆく荒廃の中を
そしてより良き感情をすべて争いのままにした

In wild reflection o'er his stormy life;
But haughty still and loth himself to blame,
He call'd on Nature's self to share the shame,
And charged all faults upon the fleshly form
She gave to clog the soul, and feast the worm;
Till he at last confounded good and ill,
And half mistook for fate the acts of will.
(Lara, I, 313-36)³⁸

彼の嵐の生を 激しく映して
だが尊大さ故に自ら責める気になれず
恥をわかちあうべく自然自身を訪れ、
すべての罪を新しく創った形に課する
彼女は邪魔する魂を、 楽しませる虫けらを与えた。
彼が遂に善と悪を混乱させ
半ば運命と意志ある行為を混乱させるまで

そのような人間は肝要なのだ。何故なら、彼らの性格は 査定するのに とても難しいから。典型的に Byron 詩の、これらの人間達の portrait 横顔は一連の矛盾や 矛盾した事情を通じて我々を刺す。実にスケッチの、一過する動きは 彼らの結果にとって肝要なのである。というのは 読者は、一つの sense に謳われるように思われ—— その sense は 細い表情の性格や原因を人は理解するけれども 人はつねに 解決と共に遅れていなければならぬ。あまりにも多くの factors 要素が不可避免的に人間界に含まれて 決定的な何か が常に とてもコントロールしかねるから。Byron 的英雄の生涯が 彼の意志と運命の中で同様に 混同されるとき そのように 道徳的 order への読者の計画は——それが何であろうと——Byron の presentation によって 混

同されるのである。そのような人への我々の共感 は 人間の無益さの、いうつなサインなのだ。実に、バイロンの英雄、彼の生涯の中で 読者が 彼になって 彼自身の中に見つけるものと説明する。 Byron の term の中で 彼らは “何物も示さぬ” そして むしろ 彼らは 問題を起す。

読者の中に 順序を狂わせた、憂鬱な知性を引込むことは Byron 的英雄の主な function であり、そしてそれ故 彼が “cant” の中で戦うための Byron の諸の工夫の一つとなる。すべての Byron 的英雄の中では 殆ど假説的に魅力的である。“Giaour” 中の修道僧は この話しの英雄を眺めることを恐れる、何故なら 彼の姿そのものが 彼らの良心をわずらわせるから、そして、彼の作り出す効果が、すべての Species の典型的なものだから。

With all that chilling mystery of mien,
 And seeming gladness to remain unseen,
 He had (if'twere not nature's boon) an art
 Of fixing memory on another's heart:
 It was not love perchance, nor hate, nor aught
 That words can image to express the thought;
 But they who saw him did not see in vain,
 And once beheld, would ask of him again:
 And those to whom he spake remember'd well,
 And on the words, however light, would dwell:
 None knew, nor how, nor why, but he entwined
 Himself perforce around the hearer's mind;
 There he was stamp'd, in liking, or in hate,
 If greeted once; however brief the date
 That friendship, pity, or aversion knew,
 Still there within the inmost thought he grew.
 You could not penetrate his soul, but found,
 Despite your wonder, to your own he wound;
 His presence haunted still: and from the breast
 He forced an all unwilling interest:
 Vain was the struggle in that mental net,
 His spirit seem'd to dare you to forget!
 (Lara, I, 361-82)

その態度のうすら寒さにも不拘、

見えないままにいる事への見せかけの歓びにも不拘、

彼は（もし自然の恩恵がなければ）もつだろう
 他の heart への記憶を固定させる術を。
 それは恐らく愛でなく憎しみでなく零でなく
 つまり、言葉がイメージして思想を創るのは。
 しかし彼を見た者たちは彼を空しく見なかった
 そして一度しかと見た、そしても一度彼にきくだろう。
 そして彼が話す人々は よく覚えているだろう
 そしてその言葉に、たとへどんなに軽くてもよくすむだろう。
 誰も知らなかった、又、どのように、何故かも知らず 只、彼は絡んでいた
 聞いた人の心の回りに 腕づくで。
 そこで彼は好みの中に憎しみの中に心を刻まれて
 も一度あいさつされたら いかにも短くとも
 友情があわれみが嫌うことを知った date が。
 やはりそこには最も中なる思想を彼が知っていようと。
 君は彼の魂を penetrate できないし、だが知った
 君の wonder にも不拘、彼が作った君自身のもの。
 彼の見せかけはまだ出沒する。そして胸から
 彼はすべて好まざる興味を強制した。
 その mental net の中で その争いはなかった
 彼の魂は君を忘れさせるように思へたから

そんな人間を見たことを忘れはしない。何故なら 彼は要求されぬ、月並み
 な倫理の悦楽に 生きながらにして挑戦しているから。彼は倫理的判断の、普
 通のカテゴリーをくつがえすから 不実な実在なのである。

For infinite as boundless space
 The thought that
 Conscience must embrace,
 Which in itself can comprehend
 Woe without name, or hope, or end.
 (*The Giaour*. 273-76)

無限にわたり涯しなき空間にいるかの如く
 良心が抱かねばならぬ 思想
 それはそれ自体 包むことができる
 名なき歎き、いや希望、いや 目的を。
 悲しみと不幸はバイロンの英雄を
 追ひ回す、何故なら、彼はある根本的方法で
 防がれることなしで いるから。普通の間人共は
 普通なのだ。只、これからのヒーロー達をわなにかけた背景の網に彼らが苦
 まなかつたのみならず、さらに 彼らが善意の真の複雑性をわ見ないが故に。
 普通の間人は 普通の倫理で、つまり、cant 偽善で保護されているのだ。

He knew himself a villain, but he deem'd
 The rest no better than the thing he seem'd;
 And scorn'd the best as hypocrites who hid
 Those deeds the bolder spirit plainly did.
 (*The Corsair*, I, 265-68)

彼は自分が悪魔だと知っていた、だが彼には思へなかつた
 すべての者が自分がそう思えた以上に、よりよきものは。
 だからけなした、最も良きものを偽善者だと、つまり
 より勇気ある者が、したであろう行為をしたであろう偽善者を。

この文は Byron の英雄 (主人公) の生活の回顧的目的を例証する。この人物の、不分明の、はっきりしない 複雑性を瞑想しながら読者は自分自身をふり返る。“コルセア”は精査のコワゴワした対象なので それは 彼自身について彼が暴露することについてではなく 彼が自らの、かくした心を望観観者に向かって ばくろせんと 脅すからなのだ。

Though smooth his voice, and calm his general mien,
 Still seems there something he would not have seen:
 His features' deepening lines and varying hue
 At times attracted, yet perplex'd the view,
 As if within that murkiness of mind

Work'd feelings fearful and yet undefin'd;
Such might it be —— that none could truly tell ——
Too close inquiry his stern glance would quell.

彼の声は肅かで彼の全般的身なりは隠かだったが
彼が今まで見かけたことのない何かがあるようだ。
彼の特色の深まりゆくしわは、変りゆく色合は
時折、その眺めを惹きつけるが眺めを混乱させた
恰も、その心の murkin^曇ness^黒 の中で
恐ろしい、だが、まだ定義されぬ感情が働く如。
それがたとへそのようなものだろうと ——
誰一人真に告げ得ないが ——
あまりにも質問を彼の厳しい一瞥は押へ得るだろう

There breathe but few whose aspect might defy
The full encounter of his searching eye:
He had the skill, when Cunning's gaze would seek
To probe his heart and watch his changing cheek,
At once the observer's purpose to espy,
And on himself roll back his scrutiny,
Lest he to Conrad rather should betray
Some secret thought, than drag that chief's to day.
(*The Corsair*, I, 207-22)

ほんのわずかのものしか呼吸しない
その顔つきは 彼の深まりゆく目の充分な出会いを無視するかの如く。
彼は技量をもった、つまりカンニング視線が彼の心を 探って
彼の変りゆく 頬をみつめたとき、
突然 観察者の意図を発見するを
そして自らに 彼の精査を戻す術をもった。
それは彼が コンラッドに対して むしろ
あのチーフの現在の秘密をひくよりも多少の秘密を暴露しない為

コントラッドの不可解な様相は 観察者が、はっきりと自らの生活を観める鏡なのである。読者に向かってバイロンの主人公は私語り脅す：Hiporite lecteur, man semblable, mon frère.

この特殊な バイロンの主人公の性格が、中世的悪漢からバイロンを切り離させた。しかし その悪漢がバイロンの直接のインスピレーションとして 役立つのだが。

というのは 典型的中立的悪漢は 確立された(既定の) 道徳的問題の根本的批評を 促進すべく着手するから。背景は 実にアンプロシオの性格を曲げた、それは それらがカール・ムーアを曲げたので。しかし両方のケースで我々は ある本質的 発見できる、価値の規範おきての正しさを決して疑はぬ。

先行する秩序の意味は常に、主人公的悪漢の前バイロンの取扱いの中にある。しかし Byron の物語りと劇は その莫大な影響力を達成し、そして時に悪名を達成させる。というのは、その主人公が読者に より探究的さぐりを強いて秩序と価値の標準とさせるから。

彼ら(バイロンの悪漢の主人公)は懐疑的で多くの問題を含む。と我々は言う。というのは彼らは 物事が結局 正しいとわかるのを許さぬから。我々は常に 事件について 疑い、それらの意義につき懐疑的のままに 放置されている。

例えば“Giour” 或いは“Lala” 或いは“cain” の中での道徳的複雑性は、アリストートルの悲劇的影響について(関して)バイロンが実存的に読みとった必要な結果なのである。Byron は述べた、悲劇の“目的”はあわれみと恐怖である、だが 彼は これらの情緒の浄化及び秩序の最終的意味の復活については何も云っていない。アリストートルの medias res の中の stay を Byron が読んだことは 彼の物語りや劇が 特色的に、愉悦、理解、そして政治の間に提起するように 諸問題を提起することを拒否する。

前バイロンの悪魔的主人公は感傷的人物である。何故なら 彼らは窮局的に 彼ら自身が我々のために 提起した知的問題を脇へよけたから。しかし バイロンの英雄は 彼の懐疑的問題を遂行する。これはバイロンの問題や劇は 实际的に知的作品であり、一方、（それらの）“修道僧”や“イタリア及び Rauber”はある点で その問題点を抑制し、且つ、読者の良心を休めるからなのだ。

バイロンは主人公の悪漢の最も中世的処理の、この緩和（加減）的性格を見抜いたようだ。しかしミルトンを これらの人物の意識 father なる彼を、彼は格別に除外した。ミルトンの意識は バイロンに云わせれば 彼自身の如く 探りを入れる、かつ、落着かないものだった。実にミルトンの意識は 只単に創られているのみならず、それは積極的に、一連の国定観念への、組織、いや、証拠に 関する議論を避けるものである。

彼も亦、人を微発し 彼のepics 絛情詩 の中に含まれた諸問題について、あるとても 独断的条件の物質を非独断的取扱いにより疑惑を起させるのである。多くの近代学者はリー・ハントに同意しミルトンの絛事詩については belief な構造について Byron に一致しないだろう。それは全面的に学問的に 別問題である。たしかなことは—— ミルトンはバイロンの主人公の横顔を作りあげる詳細のみならず、バイロンの、特意の) 風変りの、その主人公（ヒロイン）を作りあげる詳細及び彼の、環境の懐疑的扱いの信号的影響力だったということである。

ミルトンが擁護した知的自由は ——それが（再び立ち上り）ミルトン自身の影響力の元に、バイロンの中で再び立ち上ったとき 一つの新しい より激しい形態をとったのである。

一つは恐らく、ミルトンは、彼の気まぐれな子孫を実証し得なかったであろう——おそらく否認しただろうに————ということを肯定して安全だろう。しかし それにしても fathers ——少なくとも Jahweh の時代からの父親——は常に、もっとも、それ自身の——イメージ及び Jawweh の時代から父親は

常に、もっとも、それらのイメージ及び類似性において、形作られた子供たちと共に、つね一人造られたことになるだろう。

〔V〕

バイロンの“Don Juan”の中で、後の話しの中で、いや、“Cain”の如き劇の中での、悪魔的主人公の後続的使用は、わずかに、だが我々が初期の物語りに見る如きものと異なるのである。勿論バイロンは、常に、自分の作品の主人公とは懐疑的である——例へば我々が“コルセア”に対する有名な結論の中で思い出すように。

彼はコルセアの名前を他の時代に委せた 一つの美德と多くの犯罪をリンクさせて

バイロンの意味することは——コンラッドの多くの罪に対して、我々は、彼の（バイロンの）“一つの美德”即ち メドラへの彼の愛を対比させてはならぬ ということである。さらに、バイロンは 彼の line が姦通罪に含まれる、かの女性に関するキリストの言葉を思い出すことを望んでいる。

：“多くは彼女にされるだろう。何故なら 彼女は多くを愛したから” (Luke 7.47)

バイロンの Lady Blessington への言葉は、他人の罪への寛容的態度をもつ必要に関し、不可避的に come to mind 思い出される。

しかしコンラッドの最後の判断は あまりにも不明瞭にされている。それはバイロンが、ずるがしこく 我々に、コンラッドに向かって彼の罪を許すよう求めているからでなく 彼がほんとうに——そこに、いや、詩それ自体の中に——コンラッドの真の犯罪性を明確にしないからなのである。

バイロンの物語りの主人公たちは 事実 そんなはっきりとは犯罪的ではな

くて——そのことをバイロンは 彼らが悲劇的立場を達成する筈だと 感じた——むしろ 彼らは冷く 不本意である——攻撃的にそうなのである。バイロンは 彼ら（主人公）を使って 彼の聴衆のため、一つの道徳的問題を作り出そうとしている。しかし彼は彼らの同情的、非同情的性格の反対感情を、とてもルーズに提示するので 道徳的問題の提示がその分析をゆるくしたり、弱めたりするのである。

“Cain” の如き劇の中で——バイロンの主人公のあいまいさについて ずっとよりはっきりした理解をもって書かれている——その立場は、バイロンが よりずっとはっきりした判断を ルーシファ 及び Cain の両方の犯罪的振舞いに対して下しているからとてもちがっている。我々は彼らに同情する、しかも我々の同情は 彼らの中の 無邪気であり 美德であるものに対してではなく、彼らを 罪へと追いやったものに対してなのである。

Cain の誇は 犯罪者なことなので 致死のものでもある。しかも我々は この劇の中で 彼の美德は完全にそのようなプライドの保持に没頭していることを知る。同様に、ルーシファは 鋭く バイロンによってプライドを他の俗世間さの故にはかられており、そして 彼のこの作品中 最大の瞬間は 同時に彼が最も明快に判断される瞬間でもある。意義深いことだが、ミルトンが、バイロンが判決を下す手段なのである。

その場面はルーシファが判決を下す場面であり そのとき彼は Cain に神を無視して heroic life を いかにも生くべきかについて、忠言しているのである。彼は（引続き）知的自由の ringing 擁護を結論ずけている。

*One good gift has the fatal apple given. —
Your reason: —let it not be overswayed dominate
By tyrannous threats to force you into faith
'Gainst all external sense and inward feeling:
Think and endure,—and form an inner world
In your own bosom—where the outward fails;*

So shall you nearer be the spiritual
Nature, and war triumphant with your own.
(II, ii, 459—66)

一つの良き贈物は 致命的リングを与えた——
つまり君の理由づけ——それをして支配させるな
暴君的威嚇により、やむなく信念を迎える。
すべての外的センスと内的フィーリングに対して。
考えよ、耐えよ——そうすれば内的世界が形成され
あなた自身の胸の中に——そこでは外界は入れぬ。
かくして君は精神世界に 自然により近づき
あなた自身の力で戦は勝ち戦となるだろう。

この言葉は 概して “Paradise Lost” におけるアダムとイヴに対するミカエルの最終的説教（熱心な奨め）を憶い出される、が 特に、“真の自由”と“理由”（X II 79—101）の関係の理論、信念と寛容への説教、アダムとイヴ及び彼らの子供たちの維持せねばならぬ sin と evil との戦い、斗争への予想を憶い出させるものだ。

バイロンは亦 特別に ミカエルの約束——アダムとイヴは ずっと幸せな三人の間のパラダイスを所有する——をも憶い出させる。

この間接的言及の文脈の中で ルーシファの言葉は力強い、完全な 陳述を身につけている。

先ず第一に、バイロンのルーシファは ミルトンのミカエルの口から話されるべきである という事実の中の皮肉を取逃してはならぬ。

更に、Cainの文脈の中で ルーシファの言ったことは Cainの心をしいたげ Cainを彼（自身）の悪魔的使徒たらしめんとする彼自身の試み、即ち、カインの心をしいたげ（圧制し）Cainを彼の悪魔の使徒たらしめんとする（Cainは首尾よくこれに抗した誘惑）彼自身の試みを蝕む^{むしば}のである。

しかし最後に 外界に勝つため“内的世界”を送ろうとする考は あいまいに この劇の中で再現されてはいない。

というのは この文は 内的（世界）楽園について ミカエルの有名なことばを ほのめかすだけではないから。この文は亦、“次の詩句をもたらす人”についての“失樂園”の中で、先立っての悪魔の類似的表現を憶い出させる——

A mind not to be chang'd by Place or Time.
The Mind is its own place, and in itself
Can make a Heav'n of Hell, a Hell of Heav'n.
(I. 253-55)

空間、時によって 変えられぬ心
心とはそれ自身の空間であり、そして自身
地獄から天国を創り、天国から地獄を創り得る

これは バイロンが彼の詩で数度 繰返され反響させた文であった。そしてマンフレッドの中で最も顕著に。しかし Cain の中でバイロンは 劇的に悪魔の主人公の矛盾 paradox を例証し その自由礼讃と個人高潔は明らかにある意味で はっきりと正当化されるものであり だが 別の意味では 自己破壊的である。

Cain そのものは主として単なる致命的 paradox 矛盾と関係しており それは Cain が 彼の弟を殺した点で（完成され）かつ又、バイロン（と Cain）が明らかに責められねばならぬ行為である。

さらに この行為の悪はたしかに ルーシファと Cain の力強い、そして確実な内部世界への——あるいはもっと積極的な点で、とに角、彼らが高潔に固執する故——貧欲と関係するものである。

Cain が Abel を殺したことは罪であり、個人のヒロイズムでもある。

すべての美德にもかかわらず バイロンの若き日の物語り（と）は この詩的理解の程度に行きついていない。ララの中でバイロンは 云う。

In him inexplicably mix'd, appear'd
 Much to be loved and hated, sought and fear'd.
 (I, 289-90)

彼の中に 云い得ない程に入り混り現われていた
 愛され憎まれ求められ恐れられる多くのものが

しかし その考は Lala 及び Cain 及び島の中で同一である一方、只、それ以後の 作品は、実に、ルーシファ、カインそしてクリスチャンの中のあのよ
 うな矛盾的混ぜ物を表現している。

初期の詩では これら異なる性格のものは、単に相並んでのせられていたが。
 それにも不拘 バイロンの初期作品の中の The paradoxes of heroism の
 探究は彼にとって主要なステップなのである。

先ず第一に、このこと それは 重要なことだと、何故なれば ミルトンの
 作品中 バイロンは人間の heroism のあいまいな考を形造り——heroism が
 密接に 個人的 且つ、社会的破壊と親しく関係し合っていることを (事実)
 を論じたから。

第二に、この物語りは バイロンの意味は——社会はバイロンの主人公の
 破壊的生涯の中に巻き込まれるという——を明かにしている。実に社会が
 巻き込みをみなければならぬ——つまりバイロンの主人公はよりはっきりと
 社会 (彼が動く、いや、彼が形成されている) の変装した真実を明にするのみ
 ならず 技術的に、この考が バイロンを駆り立て物語りの中の聴衆を巻き込
 み 次の如く暗示するとすれば——即ちもしバイロンが 彼自身の暗い主人
 公のようであれば、それなら聴衆も バイロンの主人公の敵対者の如し。彼ら
 は、その関係は バイロンの気取った道徳的気取りへの関係が性格に共生的で
 ある hypocrite lecteur なのである。

バイロンの次の、ミルトンとの出会いは、——1816年、スイスで始ったの

だが——（彼の）前年から生じた。

はじめ（1816—1817）このミルトンとのつながりの第二段階は亦 比較的 敘事詩的の見せかけ（要求）から切り離されたものだった。それにも不拘 バイロンは 1816年、ミルトンに対して ずっと より意識的やり方でたよった。そして彼に、故意に彼を 1812—15に真剣にほり下げた、主人公的理想、再建のためのモデルとして、又、1816年 英国から彼を追放した。そして 個人的 終結から殆ど倒した主人公的理想、再建のモデルとして彼を利用した。

1817年の半ば頃まで バイロンはミルトンを深く個人的やり方で用いた。もっともその利用は 全面的文学形態で述べられたものだが。この時期の詩は大いにバイロンの “みじめな同一性” のセンスに支配されており そして その機能の一部は この “みじめさ” の性格を分析し、かつ、彼自身の確実なセンスを恢復することである。詩とは、即ち 個人的なもので 治療できるものである。この重要な 移行時期は時に1817年の夏頃終わるが このとき チャイルド ハロルドの 第四巻を やり直していた。 “Beppo” がそのとき書き直されつつあり そしてチャイルド ハロルドの第四巻の中で バイロンは こう述べている。

人生に於いて 始めてのことだが——

偉大ならんとする彼の希望は文字の中で 打ち立てねばならぬだろう。それでは今、我々が向き直らねばならぬのは この時期なのだ。

—— 以下次号 ——

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford: Byron, Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge : The Poetical Works of Lorks Byron: Vewis Prints.
- 3) Leslie, A. Marchand: Byron's Poetry, John Murray.
- 4) Francis, M. Doherty: Byron.
- 5) John, D. Jump: Byron, Rontledye and Keygan Paul.